

一 同志社女子大学 看護学会講演会（2016年11月30日）一

同志社初期における医療・看護教育
—新島襄の志と取り組み—

Doshisha Hospital and Training School for Nurses

本井康博（元同志社大学神学部教授）

Yasuhiro Motoi

同志社の忘れ物

皆さん、こんにちは。久々の田辺キャンパスです。

私が学生の頃の同志社には田辺キャンパスはなく、大学が六学部で、女子大は多分一学部だけだったと思います。それが今やふたつの大学を合わせると二十学部ですから、とんでもないビッグな学園になりました。特に二十一世紀に入ってから、スポーツ系あるいは医療、看護といった系統の学部や大学院が五つも増えました。具体的に言いますと、女子大では二〇〇五年に薬学部、二〇一五年は皆さんの看護学部。一方の大学では、スポーツ健康科学部、生命医科学部、そして大学院の脳科学研究科。医療・理科系学部が多くなってきました。

ところがです、ひとつだけ忘れ物があります。医学部です。もう二十学部もあるからええやろ、と言われかねませんが、創立者の新島襄先生の気持ちを考えると、どうしてもやっぱりあとひとつが不可欠です。増やすとしたら医学部です。実際に新島当時のほうが、医学部に近かったんです。だって病院と看護学校を創ったんですから。今からちょうど百三十年前のことです。両方とも新島が亡くなってから潰れました。

医学部

それじゃ、新島はどうして医学部（病院と看護学校を含めた）を目指したのか、と言いますと、そもそも欧米の大学には医学部が付き物です。ほかには、神学部（文学部）と法学部です。神・法・医の三学部揃い踏み、これが欧米のスタンダードというか、伝統的な大学の姿です。このうち、神学部と法学部は新島が亡くなってからできました。ですが医学部だけは、いまだにない。

新島が医学部を欲しがった要因には、ほかにもあんがい個人的な事情や思いがあったように思われます。自己体験です。結論的に言いますと、彼は生涯にわたって半病人で、そのため若くして亡くなっています。四十六歳と十一か月の寿命でした。自分でも「諸病ノ問屋」(『新島襄全集』二、三九一頁。以下、②三九一)とか「病魔之囚人」(④三九)とか自称し、病弱なのを自覚しております。罹病や入院の経験が多く、生涯で罹った病気は軽く二十を越えます(宮沢正典「新島襄と病気」二〇三頁、伊藤弥彦編『新島襄全集を読む』晃洋書房、二〇〇二年)。毎年夏や冬には、避暑、避寒、保養のためにあちこちに掛けることが多かったのも頷けます(田中真人「新島襄の移動空間」二〇〇～二〇一頁、同前)。

この結果、新島は自然と病人に対する思いやりが深かっただけでなく、病院や医師、あるいは看護婦や看護学校などへの想い入れや注文も人一倍強かったと思いますね。

函館での医療体験

新島の紹介を兼ねて、この点をもう少し述べてみます。四十七年近い生涯を病気との関連でざっと見てみます。幕末（一八四三年）に江戸で生まれ、二十一歳で「こんな封建社会、いやだ」と自由を求めて密出国を図ります。そのため欧米のどこかの国へ行きたくて、ひとまず函館へ向かいます。もうこ

の時にすでにリウマチと眼病を患っていました。函館で脱出の機会を伺う間に、当地のロシア病院で治療を受けております。これが新島襄と西洋医学との最初の出会いです。不思議なことに、江戸ではこういう機会は、なかったんですね。

函館での治療は、彼にカルチャーショックを与えました。ロシアの病院、すご過ぎるというのです。それに対して、わが国の医者や医術（漢方医や東洋医学です）はなっていないと嘆きます。ここは本人の言葉を交えて紹介するのが、ベストでしょう。こうです。

「さてこの病院は、ロシアの皇帝がすべての経費をまかなっている。日本の医者が（十中八、九まで）病人の貧富を見分けて、薬を差別するのと違い、物乞いのように貧しいものにも病氣しだいで高価な薬を与える。その願いは、病氣が全快し、患者がロシア人を慕うのを望むだけである〔傍点は新島による〕。

右のように手厚く対応しても、一切謝礼を要求せず、全くの施しである。しかし、人々は皆、全快すればなにかしら品物を持参して、医者に感謝するという。〔一方、〕日本の政府が建てた病院は、ロシアの病院とは相反し、食事は良くなく（卑しい役人がこれによって金を得る）、病人が必要とする薬も良くない（医者がこれによって金を得る）。

それはさておき、薬を調合し、病氣を診察する肝心の医師は、竹林より来る藪^{やぶいし}医者なので、病院の中には人がいない（掃除は行き届かず、衣類も時々しか替えない。施しをしようという考えなど、どこにもない）。

これに反してロシアの病院には病人が充満し、外来の病人はおよそ五、六十人ほどである。箱館〔函館〕の人が、長年ロシアの恵みと救いを受ければ、日本の政府にそむき、心からロシア人を尊敬するようになるだろう、と大変嘆かわしく思う。ああ、ロシアの先を見越した政策を、わが日本政府はなぜ察知しないのであろうか（編集委員会編『現代語で読む新島襄』四二頁、丸善、二〇〇〇年）。

海外での医療体験（1）

こうしてみると、新島は脱国して現地で欧米社会を自分の目で直接見る前に、西洋医学に対する憧れが（日本の医療への失望と共に）かなりあったのでは、と思われまふ。その後、実際に八年間にわたってアメリカで留学生活を送ることになりますが、その間、病氣や健康に関してさまざまな経験を積みまふ。

ひとつは、日常生活での健康への配慮です。江戸での生活がいかに不健康であったかを知らされます。江戸にいる弟（四歳下です）にお兄ちゃん風を吹かせて、手紙でアレコレ忠告します。酒、タバコは止めなさい（新島も両方やっていました。特にタバコは大好きでした。渡米後は禁酒禁煙です）。それから廓^{くわ}などで女遊びはしないように、とくに性病は怖いから、と。

細かい注意としては、部屋の掃除を時々するように。下着も定期的に取り換える。せめて一週間か十日に一度は替えなさい。想うに、新島自身も渡米前は、禪^{ぜん}を半月くらい履き続けていたんでしょね。食事に関しては、沢庵^{たくあん}は塩分が多いから、食べてはいけな。むしろ肉を食べなさいと。江戸時代には肉は食べてはいけな事になっていました。許されるのは、まあせいぜい鶏肉でしょね。新島の場合、二十歳の頃に江戸から大阪に行く機会があり、そこで牛肉を初めて食べています。

弟への注文は、さらに続きます。散歩をしなさい、風呂にもちゃんと入ること。こういう細々^{こまごま}したことをアメリカから書き送るということは、アメリカに渡ってから新島の衛生思想なり健康情報が随分増えた証拠ですよ。

新島の健康との関係でもっと大事なのは、大学時代に保健体育を履修したことです。大学とはアーモスト大学という名門大学です。彼はここで保健体育を習います。アーモスト大学は、全米で最初に正規の科目として「保健体育」を導入した大学です。まだ体育の先生なんかいない時代ですから医者を体育の先生と呼んで、講義と実技を担当させます。そのために学内に体育館をいち早く建てます。

体育は必修でしたから、新島は日本人として初めて正式に体操や体育、あるいはスポーツ、運動に接します。解剖学や生理学といった講義も受けました。

海外での医療体験（2）

それからヨーロッパ体験です。新島襄はアメリカ留学中に大学院を休学して一年間、ヨーロッパを回っています。今で言う文科省のお役人（それも高官です）に随行して教育視察をするため、途中、ロンドンでは聖トマス病院を視察しております。ナイチンゲールに会えたかどうか分かりませんが、日本人としてかなり早い視察ですね。すべての用務を終えてから、新島はドイツにひとり残留します。療養のためです。

有名なヴィースバーデンという温泉町です。日本で言えば、有馬温泉や熱海温泉といった所でしょうか。リウマチで寝られないぐらい身体が痛んだようです。温泉療法を半年間やりましたが、ほとんど効いていません。療養の効果なくアメリカに戻り、大学院（神学校）に復学し、翌年に修了してから帰国します。

同志社を立ち上げてから、新島はもう一回、欧米に出向いています。目的は、保養のためです。このままでは生命が持たないという医師の勧めもあって、一年半の間、同志社を留守にしました。ヨーロッパでひと夏、避暑をしてから、アメリカで療養する、という長期の旅になりました。

この旅行中、アルプスで命を落としかかっております。山登りが好きなので、スイスからイタリアに抜けるサン・ゴタル峠を登った時に、心臓に異常をきたし、歩けなくなります。ほうほうの^{てい}体で峠の宿屋に辿りつきます。が、車（馬車）も医者も呼べず、怪しげな素人療法を試みます。持っていたカラシを胸に塗ったりしますが、痛み・発作は止まらない。もう駄目だと観念し、携帯していたスケッチブックに遺書を英語で書きました。一枚書いてもまだ生きていましたから、二枚目にも挑戦しました。これらは今も同志社（新島遺品庫）に残っています。こんなことが書いてあります。

自分が死んだら、ミラノの教会で葬式をしてくれ、とあります。だからお墓も当然、ミラノですよ。そうなら、現在、東山（若王子）の同志社墓地にある新島の墓の前で毎年行なっている新島襄永眠記念礼拝は、イタリアで行わなければならないところでした。

命を取り留めて、アメリカに戻った時、時間を見つけて療養します。ニューヨーク州のクリフトン・スプリングスという、これもまた温泉町にあるサナトリウムに三か月間、滞在（入院）します。この時は「脳病」（頭痛やノイローゼでしょうか）に悩まされていたのですが、結局、完治することなく、日本に戻ってきます。

帰国直前の体調を紹介しますと、「我脳、破裂スヘキモ」と言っております。脳が破裂寸前だということです。にもかかわらず、「千載一遇」のチャンスだからと同志社や日本の伝道のために頭と身体を酷使しています（③三六七）。これでは長生きなど、どだい無理です。

新島を^み見た看護婦（1）

二度目の外遊から帰国して以後、大磯で亡くなるまでは、わずか四年ちょっとです。その間もあちこちで療養したり避暑や保養をしたりという生活が続きます。ほんとに半病人ですよ。東京に行った時（一八八八年四月）には、有名なベルツ先生に二度も往診してもらっています（⑤三〇一、三〇五）。ドイツ人医師で、世を時めく帝国大学（東大）医学部教授です。「あなたの心臓はいつ止まってもおかしくない」との診断を下されました。

日本人ドクターでは、軍医のトップ（陸軍軍医総監）、橋本綱常です。診断の結果は、「胃ヨロシカラズ」でした（⑤三〇三）。ちなみにいずれの場合も、新島は謝礼として十円を包んでいます（⑤三四四、⑤五八一）。今なら二十万を軽く超える金額でしょうね。ほかにも毎日のように来てもらっていた日本人医師、難波一がいて、彼にも十円（薬代以外に）を払っています（③五八一）。

このように何人もの医師の診断を受けるかわら、新島は五月に入ってから東京での滞在先（粟津家）で専任の世話人を雇っています。日記には「井ノ上お石ヲ雇ヘリ」とあります（⑤三〇五）。彼女が「看護婦・井上石」なのか（⑧四四二）、家政婦なのかは、判断に迷いますが、新島自身はすぐ後に見るように看護婦と記しています。「止宿料」として「七日分（日ニ三十銭位）」（つまりは約二円か）を支払っていますから、泊まり込んでの看護と思われ（③五八一）。

ほかにも新島は、夏には札幌や伊香保（群馬県）で、冬には神戸で静養したりしています。さらには湘南（茅ヶ崎）のサナトリウム（南湖院）でも一か月近く療養しています。この施設は、京都の医学生時代に同志社教会に通っていた高田畊安^{こうあん}という医師（帝大でベルツなどから医学を習いました）が創設した施設です。「室内ハ^{とことく}尽西洋風」ですから、洋風好きな新島には「実ニコンフォルテブル・ルーム」でした。食事は別にして、個室の賃料は一日六十銭でした（⑤三三六）。

新島は海外での生活が長かったので、和食が駄目なんですね。だから洋食を出してくれるこの施設は、とても居心地がよく、ありがたい療養所でした。ちなみに、ここでは勝見正成という医師から治療を受けますが、退院する時、薬代とは別に「謝儀」として五円を出しています（⑤三四一～三四二）。

一方、看護の面倒を見たのは、井上石という女性です。新島の日記（一八八八年五月二十五日）には、教え子である「徳富〔蘇峰〕氏、看病婦井上石女ヲ携テ来ル」とあります。たまたま近所の別荘にいた旧友の富田鉄之助（日銀副総裁）が「徳富君ニ計リテ看病人ヲ遣シ呉レタル」結果でした（⑤三三六、傍点は本井）。徳富は自分が経営する新聞社（民友社）の若手社員の人見一太郎に看護婦派遣の件を依頼したようです。そのことを新島は臨終の床で感謝して、遺言にその旨を書き残します。新島の遺言を口述筆記したのは蘇峰ですが、それには「人見一太郎君、君ニ謝ス。医師、看護婦等の周旋御芳志、偏^{ひと}ヘニ感謝す」とあります（④四〇七、四一三）。

南湖院に入った翌月三日、「東京ヨリ岩上エン子、島^{きん}謹看病人〔男性のようです〕、来院する」とも日記にありますので（⑤三三九、三四三）、看護婦は交代されたようです。井上石は一週間くらい宿直しましたから、五月一杯で勤務を終えたのでしょうか。

新島八重が京都から海浜院に呼ばれたのは、その直後です。着いてすぐに彼女は裏の姿を見てショックを受けます。裏は海岸を散歩中でした。八重によると、その姿は「足には軽き草履を履き、一つの手はつえ、もう一つの手は看護婦」の肩に寄りかかり「静かに歩み来りし」といいます（③五九〇、新島八重子「逝きし夫を偲びて」三三頁、『新島研究』八、一九五六年一月）。想像していた以上の衰退振りだったのでしょうね。八重とて、夫がここまで酷くなっているとは、まさか予想してなかったようです。

この時の看護婦は、井上と交代した岩上エン子でしょうね。ならば以後、八重も岩上と共に湘南で裏の看護をしたと思います。

「日本のナイチンゲール」と新島八重

八重には看護の経験がありました。だから、新島の医療志向には、夫人の影響もあるのでは、と推測することも可能です。三年前のNHK大河ドラマ、「八重の桜」を見た方は納得できますが、八重は時に看護婦のイメージで見られます。現に、修学旅行生のお土産用に本学キャンパス（ハリス理化学館）では八重ファイルを売っております。「八重さんの生涯」を四つのキャラで表現しているなかに、白衣を着た八重の看護婦姿も入っております。看護帽にはご丁寧^ごに同志社の徽章がつけてありますが、これはヤリスギです。

しかしこのイメージ、わりと強いですよ。時には、「日本のナイチンゲール」に例えられたりします。「八重の桜」で八重を演じた綾瀬はるかサンは、大河ドラマが終わった後も、会津まつりに毎年、参加しますが、今年のパレード（九月二十五日）ではなんと白衣姿の看護婦でした。さすがにキャップには同志社マークはありませんでした！

八重の看護婦姿を使い過ぎると、どうなるか。同志社の場合、クレームが来たりします。同志社は新島八重をダシにして、看護学校あるいは看護学部を創るんや、と外から、時には中（スタッフ）からも言われます（拙著『新島裏の師友たち』四一八頁、思文閣出版、二〇一六年）。だから、この風評には慎重であるべきです。八重さんの影響が決定的だとはどうてい思えないからです。

確かに八重は戊辰戦争（江戸時代の最後、日本が東西に二分されて戦った国内戦争）で看護経験があります。もちろん無資格ですよ。彼女は、会津まで攻め込んで来た西軍（薩長主体）を鶴ヶ城で迎え撃った会津戦争に従軍し、自ら銃を引っ提げて銃撃戦を展開しました。八重は西軍によって京都で弟を殺され、会津でも父親を殺されています。その仕返しをするのが彼女の従軍動機です。しかし、東軍（会

津軍)は結局、撃ち負かされ、城内には死人や傷病者、怪我人が続々と出ました。埋葬や看護は生き残った者たちの務めですが、八重はここでも大活躍をします。

明治維新後、兄(山本覚馬)を頼って京都に来てからも、対外戦争が起きると、八重は黙っておれません。「戦争上がりのお転婆娘」を自称する八重は、日清戦争や日露戦争では、志願して篤志看護婦になり、広島や大阪に出掛けて、傷病兵の面倒を見ます。広島出張の場合など、日赤の看護婦だけじゃなく、皆さんの先輩にあたる京都看病婦学校の学生をも引率しています。会津戦争と違って、この時の八重は専門的な訓練を受けた看護婦として看護活動に当たっています。個人的にも姪っ子を始め近親者四人に看護婦になることを勧めてもいます。

ナイチンゲールとの差

だから表面的に見る限り、「日本のナイチンゲール」と目されるのも、自然な気がします。看護婦である点では、当たらないことはないのですが、けれども、純然たる赤十字精神から見ると、様子が違ってきます。ナイチンゲールがクリミア戦争でやったことは、敵味方を問わず傷付いた兵士たちの看護をすることでした。「敵味方を問わず」が大事です。ところが八重は、弟や父親が殺された会津戦争でももちろん、日清・日露戦争のときも、ひたすら味方の看護に終始いたしました。

ここでは、敵兵は憎むべき存在で、傷の手当てをすることなんぞ飛んでもありません。こうなると、ナイチンゲールの精神からは外れます。会津で「女だてらに」、いや「女サムライ」として銃を手に戦った八重にすれば、新島に出遭って信徒となつてからも、「汝の敵を愛せよ」とのキリストの教えは絵に描いたモチでした。それを日頃から懸念していた新島は、ある時、彼女に向かって「武士の心」だけでなく、「真の信者の心」を持ってほしいと忠告しています(③三二九)。ナイチンゲールの精神が、キリスト教の教えから来ていることは、明らかです。

もうひとりの八重、木下八重

戦争中の看護活動で言えば、八重以上に国際的に活躍した皆さんの先輩がいます。もうひとりの八重です。第一次世界大戦のときに木下八重という方が、日赤から選ばれてパリに行き、傷付いた外国人兵士の世話をしています。以前、NHKテレビが「歴史秘話ヒストリア」(二〇一四年五月七日)という番組で、日赤がパリに派遣した日本人看護婦たちの働きを紹介したことがあります。番組タイトルが素敵でした。「パリナースたちの戦場―看護婦が見た世界大戦の真実―」です。

残念ながら番組では木下さんのことはあまり出て来ませんでした。ですが、大変有能な方で、パリでの仕事が終わったあと、ほかの看護婦たちは皆、日本に戻されたんですが、木下八重さんだけはフランス政府からぜひ残ってくれと懇請されました。だから、その後もしばらくパリで看護活動をされた、非常に立派な先輩です。ですから、京都看病婦学校でもこれまで卒業生のトップランクに位置づけられています。

木下八重と日赤との関係はよくわかりませんが、新島八重の方は看護婦の資格を実は日赤(講習)で取っています。同志社に看護学校があったにもかかわらず、です。彼女の遺品の中には、日赤から貰った証書や感謝状のほかに、日赤の「社章」や「正装用帽子」など、いろいろ残されています。

このように日赤とは深く関わった新島八重なんですが、不思議なことになぜか、夫(新島襄)が創った京都看病婦学校とはそれほど深い関係がありません。

日赤と同志社

それにしても、日赤が日本の看護活動で果たした働きは、突出していますから、同志社にとっても無縁ではありません。むしろ、同志社とは意外な関係があります。皆さまは、日赤がどこで始まったか、ご存じですよ。

そう、熊本です。日赤の前身は「博愛会」という救護団体で、一八七七年に熊本で出来ております。薩摩の西郷隆盛が、薩長中心に組織された明治新政府に逆逆して起こした西南戦争の戦場で組織され

ました。負傷者を救護するための組織です。その意味では、西南戦争は日本のクリミア戦争です。

熊本での西南戦争中、傷病兵の救護の必要性を政府に訴えた人がいます。佐野常民^{おぎゅうゆうする}と大給恒^{おぎゅうゆうする}です。二人はすでにヨーロッパで活躍していた赤十字社のことを聞き及んでいましたから、そのような救護組織を日本でも作らねば、と思っておりました。現実に新政府軍だけでなく、薩摩軍にもおびたしい死者や負傷兵が出ていることを憂慮した二人は、熊本に赴き、征討総督（司令官）として現地で新政府軍を指揮していた有栖川宮熾仁親王^{ありすがわみやたるひとしんのう}に直接、願い出ました。敵味方を差別せず、人道的な救護活動を行ないたい、という訴えです。幸いにも認められました。これが、日赤の始まりです。

博愛社が日赤と名前を変えたのは一八八七年のことですが、新島は旅日記（一八八八年～一八八九年）の余白を備忘録にしてアドレス帳にしております。それには「赤十字社事務官」として笠原某とともに「社長 佐野常民」の名前が含まれています（⑤三八八）。日赤が設立されてから、かなり早い段階で面談した可能性が残ります。看護学校や看護教育に関して、情報収集したり指導を仰いだりしたのでしょうか。

興味深いのは、博愛社の設立許可が下りた場所、いや建物です。熊本城^{ふるしろ}（古城地区）にあった熊本洋学校外国人教師館の二階です。当時、新政府軍は戦争の大本営（司令部）をここに置き、征討総督自らがここに住み込んで、指揮をしていました。要するにこの建物こそ、日赤発祥の地なんです。その後、あちこち移転したあと、今の水前寺公園脇に落ち着きます。なので、ここは「日赤記念館」として看護の世界では聖地扱いされてきました。

博愛会の誕生

博愛会は、戦争によって生まれる傷病兵の救護のために専門の看護婦を養成したいという意図から、成立九年後の一八八六年に至って東京に病院を設けます。今の日赤病院（日本赤十字社医療センター）の前身、博愛会病院です。ついで看護学校（救護看護婦養成所。現日本赤十字看護大学）が設置されるのが、一八九〇年のことです。ただし、決して日本初の試みではありません。後で述べますが、日赤でさえも看護学校に関しては、慈恵や同志社に後れをとります。

ちなみに、さきほど触れたように新島が晩年（一八八八年四月）に東京で診てもらった権威ある名医は橋本綱常で、時の陸軍軍医総監です。彼が博愛社病院の初代院長をも兼務していたのは、奇遇です。なぜなら、実はこの病院の設立を提唱したのが橋本だからです。前年の一八八五年にジュネーブで開かれた赤十字の国際会議にオブザーバーとして参加した彼は、女性救護員（看護婦）を養成する必要性を痛感して帰ってきました。その当時、日本では救護人（看護人）は男性に限られていましたので、留学中に同じことを見聞した新島と並んで、橋本は看護婦教育の面ではパイオニアです。

ところで、熊本の日赤記念館は、もうひとつ別の顔をもっています。「熊本バンド記念館」です。つまりふたつの記念館は同居しており、二階が赤十字記念館、一階が熊本バンド記念館と棲み分けています。同志社は奇しくも両方と関係を持っています。が、密度で言えば断然、後者です。理由はこうです。

ジェーンズ邸と「熊本バンド」

ふたつの顔を併せ持つ建物は、元々は熊本洋学校外国人教師館でした。今では熊本市内の観光名所で、観光マップでは、「ジェーンズ邸」で通っています。熊本洋学校は、明治維新直後の一八七一年に熊本県（旧肥後藩）が熊本医学校と並立させて設立した学校で、教員としてジェーンズ（L.L.Janes）という元軍人をわざわざアメリカから招聘いたしました。高給を用意しただけでなく、立派な宿舍（教員住宅）も新調して、厚遇しました。そのためジェーンズ邸は、熊本初の洋風住宅です。

この一階に展示されている資料の一部は、同志社が提供したものです。なぜかと言うと、ジェーンズは洋学校の教え子のうち、キリスト教に傾斜した生徒、卒業生たち（彼らは同時に洋学校の秀才グループでもありました）を同志社に送ってくれたからです。

ジェーンズが熊本から同志社に送り込んでくれた生徒・卒業生たちは、同志社では「熊本バンド」（熊本グループ、あるいは熊本組という意味）と呼ばれました。彼らは洋学校が潰れたために京都に移って

来ました。なぜ廃校されたのか。それは、信徒であったジェーンズの感化でキリスト教に傾斜する生徒が多く生まれてしまったからです。設立者の意図しない結果になったので、学校は廃校になりました。

彼らを受け入れた同志社はどうか、と申しますと、出来て半年ぐらいの、いつ潰れてもおかしくない、未熟極まりない塾でした。そうした哀れな私塾に熊本洋学校でジェーンズ先生から英語で指導を受けた秀才たち、しかもキリスト教に共鳴する生徒が、三十人以上も来てくれたのです。同志社からすれば、「干天の慈雨」、いや「棚からぼた餅」です。彼らはヨチヨチ歩きの幼い同志社を、熊本洋学校のような整然とした青年の学校にするのに、ずいぶん大きな力を発揮してくれました。

彼らの入学から三年後に同志社は初めて卒業生を十五名出します。全員、神学生。しかも「熊本バンド」(熊本洋学校の卒業生)です。その中には地元京都の人間は、誰ひとりおりません。卒業と同時に、十五名の中から日本人教授が五人(同志社女学校に二人、男子校に三人)も出ます。それまでは日本人教員は新島校長ただひとりで、あとは全員、宣教師たちでした。

さらに新島校長が亡くなったあとの人事ですが、ここでも「熊本バンド」は圧倒的な力を発揮します。彼らの中から次々と五人も校長が出ます。なので、同志社にとっては「熊本バンド」サマサマです。

再建が待たれるジェーンズ邸

残念なことにジェーンズ邸は、今春(二〇一六年)四月十四日の熊本地震で全壊いたしました。私はこの間、熊本に呼ばれてジェーンズ先生の話をしたんですが、地元の方は建物の復興に関して、ほんとに熱心でした。日赤も同志社も当然、募金に協力しています。

時間的な経過を申し上げますと、洋学校が廃校され、ジェーンズがクビになったのが、一八七六年です。翌年、西南戦争が勃発しました。空き家となった立派な教師館に、大本営(司令部)が置かれました。戦争が終わると、いろいろな目的に利用されますが、日赤誕生の建物ですから、もちろん日赤熊本支部の活動拠点にもなりました。

木造の二階建て洋館ですが、地震で全壊後の復興(再建)にはナン億というお金が必要と言われています。復元には数年はかかるでしょうね。むしろ現在の資材を使って新築したほうが、二億円くらいで済むと聞いております。

皆さんが看護師になられたらぜひ一度、行ってみてください。水前寺公園の脇にあります。日赤(新島)だけでなく、「熊本バンド」にもゆかりの深いスポットですから。

新島を看た看護婦(2)

新島は佐野常民(博愛社創設者)や橋本綱常(博愛社病院院長)と交流があったことから窺えるように、赤十字運動や看護婦養成には早くから関心を寄せていました。繰り返しますと、自身、「病気の問屋」と自認していましたので、現実に何人かの看護婦の世話になっていたことも要因となったはずです。

ここで新島を看た看護婦について付言しておきます。すでに紹介した井上石や岩上エン子のほかに、名前が分かっているのが、新島が神奈川県大磯で臨終を迎えた時の看護婦です。

本人は「心臓病で死ぬだろう」と覚悟していましたが、現実の死因は急性腹膜炎、つまりは盲腸でしょうね。この当時、盲腸になれば治療の仕様がなかったようで、痛みをモルヒネでただ抑えるだけでした。日本での最初の盲腸手術は、新島が死んでから十年ほどしてから、と言われています。

そうした新島の最期を看取った看護婦が、不破ユウ(勇、雄とも書きます)です。京都看護婦学校の第二期生です。彼女は、学生時代から新島の指導を受けており、同校卒業式(第二回)で新島の式辞を聴いた七人の卒業生のひとりです。新島が亡くなる半年前(一八八九年六月二十七日)のことで、同志社女学校卒業式(卒業生は五人)と同時に開催でした。これが最後となった新島の式辞は、旧約聖書(「出エジプト記」十五章)に基づき、「^{にが}苦き水を甘くせよ」でした(『追悼集』二、三二六頁、同志社社史資料室、一九八八年)。これはそれより二日前に男子校(同志社英学校)の卒業式で披露したものと同一内容で、男子卒業生を痛く感激させました(拙稿「クリスマス・ツリーものがたり」七九頁、『同

志社時報』一四二，同志社，二〇一六年一〇月）。

不破ユウ

ユウの結婚は卒業直後の同年九月のことで、「先生の勧めに従って、不破の家に参りました」（『追悼集』二，三〇〇頁）。新島がいわば、媒酌人です。夫は例の「熊本バンド」のひとりで、不破唯次郎ただっていいです。同志社神学校出身の現職牧師でした。つまり不破夫妻とも新島の教え子なんです。彼女は、牧師夫人として教会を支える裏方に徹します。不破は当時、前橋教会牧師でしたから、ユウは前橋に嫁ぎますが、その直後に新島が大学設立募金運動のためにドクターストップを押し切って群馬に参ります。

案の定、前橋じょうで倒れます。ユウは現地で「約四十日間〔実は二週間くらい〕、づつと〔新島〕先生の看護をして居りました」とか（同前）、「朝から夜の十時か十一時頃迄、毎日御世話申しました」と回想しています（同前六，三四八頁）。新島としては、ユウが居てくれた前橋で倒れたのが、不幸中の幸いでした。

この間、新島は病床でユウに対して、アメリカで見た看護術の消息など伝授したりしています。「主婦たる者は、看護術位は修めておかねばならぬものである。外国では殆んど左様さようです。看護術の心得ある者は、万端ばんたんやさしく、例へば唐紙からかみの開閉まで鄭重だ」といった風に、です（同前六，三五〇頁）。

新島は上州の寒さを避けるために、その後、東京を經由して暖かい湘南の地（大磯の百足屋旅館）に転地して療養いたします。結局、ここが彼の終焉しゆうげんの地になるのですが、ユウは前橋から大磯にも何度か出向いて、新島の最期を看取ります。これが生前の恩師への最後の恩返し、奉仕となりました。

新島の死後、不破牧師は前橋から京都に転出して、平安教会の牧師に就任します。この間に京大が創立され、医学部や京大病院が誕生します。ところが京大は、指導者となるべきその手の卒業生を誰も出しておりません。その点、同志社の方が古いですから、同志社の看護学校を出たユウが京大病院初代看護婦長として迎えられました。

「東の慈恵・西の同志社」

もうひとり、大磯で新島の臨終を看取った看護婦がいます。これまであまり知られていなかった鈴木キク（菊）です。この人は有志共立東京病院看護婦教習所（今の慈恵看護専門学校）の出身です。久保田米遷べいせんという絵師が描いた新島の臨終図には、もちろん看護婦が出ていますが、これまで不破ユウと思われていた人物が、ひょっとしたら鈴木である可能性が出てきました。

新島と鈴木には、直接の関係はありません。ではなぜ、彼女が新島を看取ることになったのか。まだ謎が多いのですが、一説には東京での新島の主治医ともいべき榎村清徳院長（山龍堂病院）に随伴して大磯に入った、と言われています（拙著『新島襄の師友たち』二〇九頁）。この前年の秋、新島は山龍堂病院に五日間入院（一八八八年九月二十五日～二十九日）して、榎村から治療を受けております。入院費用は「一日上等一円」でした（⑤三七五）。

この榎村が東京から大磯に呼ばれたのは、新島が死去する一週間前（一月十七日）のことでした（⑧五七三）。その際、同志社の理事であった湯浅治郎（群馬出身で、当時は東京在住）の指示や助言があった、と私には思われます。なぜか。鈴木キクは湯浅の孫だからです。湯浅は、新島危篤の知らせを受けて、一月二十一日、看護婦を連れて東京から一番列車で大磯に駆けつけます。この時、彼が同伴した看護婦が、慈恵医院で働いていた鈴木（後に看護婦長）ではなかったでしょうか（『新島襄の師友たち』二〇九頁）。この日、榎村医師も午前九時に新島の診断と手当てをしています。ユウの証言によれば、臨終を看取った看護婦は、「榎村博士の御指図で来られた赤十字社の鈴木看護婦と私とふたり」であったといいます（『追悼集』六，三五三頁）。

いよいよ最期を覚悟した新島は、駆けつけた一人ひとりと訣別の握手を交わします。この時、看護婦のひとりが氷嚢ひょうのうを洗うために部屋を出たのを誰も気づかなかったのですが、新島は彼女を呼びにやらせ、「おおいに御世話になりました」と礼を言い、握手しております（『新島先生就眠始末』一四六頁、

復刻版、一九九六年)。いかにも新島らしい気配りですね。

ところで、ユウが鈴木キクを赤十字社と回想しているのは、不可解です。出身校は慈恵でしょうね。慈恵というと、この分野ではライバルとは言えないまでも、同志社と並ぶ双壁の存在でした。慈恵は日本で最初の看護学校。二番目が同志社ですから。いずれも日赤の看護学校よりも早いです。つまり「東の慈恵・西の同志社」というわけです。東西の名門看護学校を出た看護婦が、同志社創業者の臨終にそれぞれ立ち合ったというのは、実に奇遇ですね。これ以外にも両校間には、さまざまな人的な交流がありますが、その究明は今後の課題です。

帝大医学部に対抗

以上、患者体験や看護婦を含めて、新島と医療との個人的な関連を紹介してきました。表面には出て来ることにはないのですが、新島の医学部構想の背景に潜む、意外に重要な要素かなという気がします。

そうした要素とは別に、新島が医学校や病院、看護学校を欲しがった表立った要因としては、アンチ帝国大学（東大）の姿勢をも挙げることができます。こういうことです。当時、医学部や医科大学は東大以外にはありません。まして私立大学では、です。そうした状況下に、あえて私学で医学部を創りたいと言うのですから、そこには相当の願いと覚悟がなければなりません。

新島は日本で最高権威の医師、ベルツ先生から治療を受けながら、ベルツ先生を擁する帝大医学部（だけ）ではよろしくないと思っているんです。決定的な理由は、帝大の医学部はドイツ医学が中心だからです。日本の医学界は、当初から最近までドイツ偏重でした。一例を挙げれば、診療記録はかつてはドイツ語で書くことが通例なので、「カルテ」(Karte)というドイツ語が使われていました。カード(card)とかレコード (medical record) とは言いませんでした。さすがに戦後は英語や日本語で記入されるようになりました。

それくらいドイツ一辺倒だったんです。外国人医師・教授といった「お雇い外国人」もドイツ人中心なうえ、日本人医師もドイツ留学が望ましい時代です。こうした人たちは、日本人、ドイツ人を問わずキリスト教を嫌うんです。ひとつには、彼らは宗教や倫理にまったく無関心で、関心があるのは純粋に科学や技術のみ。その結果、ドイツ人教授など、概してアンチキリスト教です。これが新島にとってはたまらなかつたんです（⑥二一六）。新島は牧師になってアメリカから帰ってきますから、病院や看護学校を立てるにしても、その基盤はキリスト教主義以外には考えられません。新島には、ほとんどの医者が悲しいほど腐敗している日本の現状を浄化し、清めるにはキリスト教が必要だ、との認識がありました（⑥二一五）。

ではそうした現状を改めるにはどうすればいいのか、というと、アングロサクソン系の医学、つまりは欧米流の医学の導入です。特にアメリカ流の医学です。かの国のキリスト教、すなわちプロテスタントに基づく病院や医学、看護学校が欲しいと言うのです。こうして、一八八〇年代後半から、新島はキリスト教主義大学構想を抱き始め、その中に医学部（医学校や病院、看護学校を含む）の設立を目論みます。

結論を先に申しますと、新島の生前には同志社大学は実現しませんでした。だから医学部も陽の目を見ていません。ですが、その前身というか準備として病院と看護学校は生まれました。

同志社病院と京都看病婦学校の設立功労者

そのあたりのことを同志社女子大学は受験生サイトで、次のように誇らしく宣言しています。

「一八八六年、同志社創立者新島襄は京都看病婦学校、同志社病院を開き、看護教育を始めました。これは日本で二番目に古い養成機関です」。

詳しく言えば、病院と看護学校の開業式が挙行されたのは、今からちょうど百三十年前の八月十一日のことです。ただし、仮開業は前年でした。本開校の開業式には、五百人ほどの人が参加しましたが、建物内部を公開したところ、三千人を超える見学者が押し寄せたといます。市民の期待と関心の高さが窺えますね（『同志社百年史』通史編一、二九八頁）。

病院にしる、看護学校にしる、新島は医学的にも経営的にも素人ですから、彼ひとりではとうてい作れるような代物ではありません。設立支援に関しては、少なくとも三人の働きが顕著です。新島襄のほかに、J・C・ベリー（J.C.Berry）と中村栄助の働きが不可欠でした。皆さんはベリーや新島の名前はどこかで聞いておられると思います。とりわけベリーは、医療宣教師として岡山で伝道活動をしてきたのを新島が強力に要請して京都に招き、同志社病院の院長に就いてもらいます（ベリーの略歴に関しては、『新島襄の師友たち』一一二～一三六頁参照）。

ベリーは、病院だけでなく、看護学校と医学校を合わせた三点セットの構想を抱いていましたから、まさに新島の医学部構想と重なります。したがって、新島も準備段階から「私はベリー博士の看護学校（Dr.Berry's school of nurses）が実現するよう尽力しています」と述べているくらいです（⑥三〇五）。

個人的にもベリーは新島にとっては、主治医と言ってもいい存在で、新島が神奈川県大磯で亡くなった時も駆けつけて、最期を看取っています。だから、常日頃から新島の健康についてはやかましいくらい忠告しています。たとえば、「乗馬とか静かな散歩」のようなそれほど激しくない運動をもう少し心がけるように、との忠告です（J.C.Berry to J.H.Neesima, Apr.14, 1888, Kyoto）。実は新島はこれ以前から乗馬を心がけています。ある手紙には、神戸で静養中に「乗馬を試候処」と記しています（③708）。ベリーに言われてからは、いっそう努力したはずで、ある学生に乗馬姿を目撃されています。「先生が〔自宅脇の〕御所の内を折々乗馬で運動せられ、又、四時の〔全校〕体操時間に海老茶色の腕抜きを嵌め、和服に靴を履いて、毎日散歩せられた姿は、今も眼前にちらついて居る」（『創設期の同志社』八二頁）。

ベリーの知名度に比して、一方の中村栄助は、「誰？」じゃありませんか。京都の政財界の有力者、しかもクリスチャン実業家で、同志社の理事です。京都府議会議員を経て、衆議院議員にも選出されます。この人がお金集めをしてくれたんです（中村については、『新島襄の師友たち』二二三～二三〇頁を参照）。実は彼は日本人では徳富蘇峰に次いで二番目に多く、新島から手紙を貰った人物なんです。そのほとんどは、学校の経営、とくに募金活動についてです。いかに新島がその面で信頼していたかが分かりますね。看護学校でも創立者のひとりです。

リンダ・リチャーズ

さらに看護学校に特化しますと、もうひとり、リンダ・リチャーズ（Linda Richards）を挙げるべきでしょうね。病院と看護学校ができた百三十年ほど前の日本には、資格をもった看護婦などいません。まして看護学校で教えられる人材は、皆無です。そこで、リチャーズという女性がアメリカから呼ばれました。一教員というよりは、実質的な「校長」（Superintendent。名目的な校長は新島襄）です。

彼女は、この業界ではとても有名な歴史的な人物として、「アメリカ初の有資格看護婦」（America's first trained nurse）でネット検索すれば、すぐに出てきます。看護学校を正規に卒業した看護婦としては、アメリカで最初の女性ですから、アメリカでも引っぱりだこだったはずです。それが、いまだ看護の領域ではまったく白紙、というか未開拓な日本に来て、開拓的な仕事をゼロからしようというのですから、あっぱれです。

したがって、先の三人に加えて、彼女の名も創業者に加えるべきでしょう。彼女はベリーと並んで外国人としては大黒柱ですから。ここにいらっしゃる一年生も、すでに彼女の名前やプロフィールは授業などでお聞きになっているはずですね。もう少し詳しく知りたい方は、拙著『新島襄の師友たち』（一三七～一四七頁）を参照してください。

私は、看護学部が出来る前に、ベリーとリチャーズの功績を称えるために同志社の校舎に二人の名前をつけることを試みました。もう十六年前のことになりますが、琵琶湖のそばの北小松キャンパスに同志社リトリートが三十億円ほどかけて新築、整備された時です。新しく建物が十ぐらい出来たので、これはチャンスだと思って「ベリー館」、「リチャーズ館」を当局に提案しました。が、結果はふたつとも落ちました。「それ誰や」というわけですね。当時はその程度の知名度でした。ちなみに、「深山館」（シングル宿泊棟）や「大沢館」（ツイン宿泊棟）は当選しました。

ところが数年前に、突然「リチャーズ・ハウス」というのが同志社大学の一角（御苑の東隣り）に

出来ました。留学生主体の国際女子寮です。このリチャーズは、看護師とは別人の男性です。同志社布哇寮（Friend Peace House）を寄付してくれたハワイの資産家です。リチャーズの名前を取られましたから、今度はリンダ・リチャーズからリンダをとって、「リンダ館」はどうかと思っています。

以上のベリーやリンダのほかにも、アメリカから派遣された医療宣教師（医師）がいます。ベリーの次にバックレー（S.C.Buckley）という女医さんが、夫（こちらは医師ではなく、同志社教授）とともに来ます。当時、女医さんなんて日本にそうそういませんよ。ちょうどバックレーが京都に赴任した前後（一八八五年）に、日本人で最初の女医さんが生まれました。荻野吟子です。医師の国家試験に最初に合格した女性で、のちにあの「熊本バンド」のひとり、海老名弾正（今の弓町本郷教会の牧師でした）から洗礼を受け、クリスチャンになります。そして同志社神学校の卒業生、志方之善（彼は新島から洗礼を受けていました）と再婚します。志方は後に牧師になります。だから、信仰や結婚から言えば、言うならば同志社系の女医さんですね。

ナースとしては、リチャーズに続いてフレーザー（H.E.Fraser）やスミス（I.V.Smith）が来ます。資格をちゃんと持ったアメリカ人看護師が三人もいる看護学校など、他にありません。先進校の慈恵ですら、せいぜいひとり、多くてふたりですから。

新島の看護教育観

次に新島が看護学校を必要とした理由を見てみます。まずは受験生向けのサイト（Q&A）で、本学がPRしている文章です。

Q1 同志社女子大学看護学部設立の背景を教えてください。

A1 一八八六年（明治十九年）、同志社創立者新島襄は、京都看病婦学校・同志社病院を開き、看護教育を始めました。これは日本で二番目に古い養成機関です。新島は看病婦学校設立の目的として、「病人の苦痛を救うこと」、「看病人を養成すること」、そして「病人の心を慰めること」の三点を挙げ、人に寄り添った看護の重要性を挙げています。また「愛心を以て」看護を実践することと述べています。これは現代にも通じる看護の姿です。看護学部看護学科は新島の遺志を受け継ぎ六番目の学部として誕生しました。

A1 は新島がある集会で「看護学校設立の目的」について演説した時の原稿に基づいています。ここではもう少し詳しく、なるべく新島が語った通りの文（原文）で紹介してみます（以下、①一一〇～一一四、〔 〕は本井による補注）。

まず、欧米では看護学校はすでに開校しているものの、日本ではまだ「一種特別新発明の学校」である。その働きは、聖書にある「己を愛する如く、人を愛すべし」が基礎になっている。「病院、貧院、幼院、癲狂院〔これは精神病院です〕、又は看病婦学校等」の設立は、慈善心や宗教心から起きるもの。

まずは以上が、新島による最初の設立動機です。それ以前の看護人は基本的に男性でしたので、看護人に女性を起用するという発想はありませんでした。欧米ではすでにナースは、「ナイティンゲール女丈夫」によって「発明」されていましたが、日本では男性の看護人に代わって、資格を備えた女性の看護人を新しく養成する学校は、斬新でした。校名の中の「看病婦」という単語は、当時の人たちにはとても新鮮に響いたと思われます。要するに未開拓な分野ですから、京都看病婦学校の場合、募集人員が三十名、しかも授業料は無料とあっても、開校時の入学生はわずか五名。翌年の二期生も七名でした。その後も十名を超えることは、稀でした（廃校までの十九年間、卒業生の総数は百三十一名です）。

ちなみに新島より早く、一八六〇年から一八六二年の間に欧米に行き、実際に病院を視察した人がいます。福沢諭吉です。彼は帰国後、その見聞記を一八六六年に『西洋事情』という書物で紹介しました。病院には医師のほかにも男女の「介抱人」が必要とされ、病人五十人につき十人を抱えるのが「定則」とであると指摘しています（『福沢諭吉全集』一、三〇六頁、岩波書店、一九五八年）。

「介抱人」と看護婦の違いが不明確ですが、すでにナイチンゲール看護学校（一八六〇年創立）が来ていますから、福沢は病院で看護婦たちが働くのを見聞したはずで、しかし、新島とちがって、「介抱人」の養成（看護学校）を自ら手掛けることはありませんでした。ましてや、病院や看護学校が「慈善心」に由来して始められたことには触れていません。

あくまでも病人主体

新島の場合、京都看病婦学校には「慈善心」に基づいた三つの設立目的があるとされています。

- (一)、「^{この}此校の目的は、第一には病人の苦痛を救ふにあり」（新島は傍点を赤で振っています）。
- (二)、「熟練の看病人を養成する」こと。
- (三)、「病人の心を慰むる事」。

列挙された三項目から、大事なことが浮かび上がってきます。普通なら、設立目的の第一に来るべきは、優秀なナースを養成することのはずです。ですが、新島の場合、それは二番目に置かれています。「第一に」挙げられているのは、病人のためです。三番目の目的もそうです。三つの目的のうち、二つが病人志向なんです。患者本位です。この点はさすが新島だなと思います。

さらに新島らしいのは、以上の目的や自己の主張を補足説明する中に、大事な指摘を散りばめていることです。たとえば、「熟練の看病人」には二種類ある。機械的の熟練と精神的の熟練で、違いは動機にある。前者では、働く動機が金もうけや名誉欲、あるいは義務。それに対して、精神的に熟練した看護婦は、全く病人その人の心を思いやって、つまりは「真実の愛心」、愛の心をもって病人のために尽くす。あくまでも患者本位です。したがって、「看病婦の熟練シタルモノハ、医者ノ薬法ヨリモ大切ナル」。「看病人一ツデ人ヲ生カシ、又ハ殺ス事モ出来マスル」。医師と比べても、看護の重要性は劣らない、と力説しています。

さらに、重病人を看護するには男子よりも女性の方が甚だ適当である、とも指摘しています。男性である新島自身が体験上、言っているのですから、本当でしょうね。

「熟練の看病人」

新島は、自分が見聞した「熟練の看病人」として、ある時の演説でリチャーズを例に挙げます。これはこれまでほとんど注目されたことがありませんから、おそらく今日が「本邦初公開」のはずです。この当時、同志社の男子校に市原盛宏先生という先生がいました。「熊本バンド」のひとりで、非常に優秀な方です。この先生の娘が目の病気で同志社病院に入院しました。入院直後の二十四時間は、二時間毎に目を洗浄しないと一晩で失明するという急病人でした。

ところが、日本人ナースでその手当てができる人はいませんでした。それで校長とも言うべきリチャーズ自身が看護いたしました。彼女は一晩中眠ることなく、手当てをしたのです。この処置は、何らかの事情のため、ペリー院長の診断や指示なしで、つまり彼女独自の判断でした行為のようです。彼女の機転のおかげで、児童は失明せずすみしました。

新島はこの処方に非常に感激して、これこそ熟練したナースだと激賞しています。リチャーズの臨機応変の手際の良さは、すぐに市内に広がり、京都看病婦学校の名声は一挙に上がったといいます（『新島襄の師友たち』一四一～一四二頁）。

さらに同じ集会のために新島が書いた別の原稿があります。「生〔自分〕は衛生の事に付いては、甚^{はなだ}白ロウト」と断りながらも、同志社がなぜ看護学校を必要とするかを説いています。「貧困、又、長病者は、又、苦痛に罹り、非常に介保の看護を要する輩の心緒如何を思いやり、此輩に代り諸君の御賛成を乞ひ、此輩の苦痛、困難を救ふに甚適切なる看病人を養成すべき学校を創設せん事を要する也」（①一一八）。

新島の目線は、明らかにここでも病人に向いています。しかも、患者の中でも病気が一番重い人、長期にわたって苦しんでいる人、もっとも困っている人の「心緒」を思いやるのが大切だということです。彼らの苦痛や苦しみを軽くしたいのが、新島の悲願です。

「最も小さきものに心を注ぐ」

このことを新島の心象に即して言い代えると、「ひとりは大切なり」、あるいは「最も小さきものに心を注ぐ」となります。ここが大事です。これが新島の生きる姿勢でもあるからです。彼は後半生では、健康と仕事（とくに出張）のために授業をすることを免除されましたが、ある時、こう言っております。私がおもし元気になってもう一回、教壇に立つ日が来るならば、「クラスで最もできない生徒」に目を注ぎたいと。

同様に、学生（ほとんどが学内の寄宿舎住まい）が病気で授業を欠席すると、校長の新島は朝の全校礼拝の後に寄宿舎を訪ね、欠席者を見舞ったといえます（『追悼集』二、二二〇頁）。重病人の場合は、自宅に引き取ることもありました。

同志社大学新町キャンパスの渡り廊下に「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ、新島襄」という文言が大きく彫ってあります。一度、見て下さいね。新島はまさに「一視同仁」です。人を差別しません。性や職業、学歴、学力、能力などに差を認めません。新島は世話になった女中や下女（家政婦）を呼ぶのにすべて「さん」をつけています（『新島先生記念集』二二四頁、同志社校友会、一九六二年。『追悼集』二、二四五頁、二七三頁）。前にも紹介しましたように、大磯で亡くなる時も、看護婦（複数）に対して懇ろに別れの挨拶と感謝を述べました。

さらに言えば、単に一人ひとりを平等に扱う、というレベルじゃないんです。彼にしてみれば、一番できない一人こそ、大事なんです。聖書に出てくる「迷い出た一匹の羊を、九十九匹の羊をおいて探しに行く羊飼ひ」そのものです。病人も一緒です。最大の重病人、最長期の患者が問題です。こういう人を大事に世話をする、あるいは注目する、というのが新島の生き方です。

医心館と愛心館

ところで、同志社の教育では看護学部はもちろん、他の学部でも心（ハート）がキーワードです。なんとんでも「良心教育」をウリにしていますからね。

七年前、こちらの京田辺キャンパスに生命医科学部ができました。このとき私に新設する校舎名を考えてほしいという依頼がありましたので、「医心館」という名前を付けました。ドイツ医学は技量や科学が主体、という新島の批判が頭にありましたので、「心」や「精神」を強調したかったのです。医学部で言えば、スキルや受験対策を教えるだけじゃダメですね。「医には心あり」です。

仮にこの看護学部棟を依頼されたとしたら、女子大単独であれば、「リチャーズ館」を勧めます。ですが、前に紹介したように、これはすでに使われているので、今ではもうダメです。で、それなら「リング館」でしょうか。あるいは、同志社大学との関連を考慮した場合、同じ医療系学部として、同志社大学の医心館に対して、女子大には「愛心館」を提案したでしょうね。生命医科学部とこちらの看護学部が、名前の上でもコラボすればいいな、と願ったからです。

「愛心」は、先に紹介した看護学部のサイト（Q&A）でも「愛心を以て」看護を実践することが、強調されていました。もともとは、新島が使った用語です。「精神的の熟練」看護婦について述べた時に、新島は「まったくその全其の病人の心を思やり、おもひ真実の愛心を以て病人の為にする人が入用である」と付け加えています（①一一一）。

以上の個人的な思惑や私案は別にして、現実につけられた校舎名は女子大内部のコラボが優先された命名になりました。先行した「憩水館」に対して「蒼苑館」と名づけられました。前者は薬学部棟で、しかもお隣の校舎です。コラボする相手としては、最適ですね。しかも、ふたつとも「旧約聖書」中の「詩編」二十三編（二節から三節）から取られていますので、よく考えられています。つまり、「主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴ひ、魂を生き返らせてくださる」（傍点は本井）という聖句を共通の出典としています。もしも命名に難点があるとすると、同志社大学の方に、すでに同音の「けいすいかん」（新町キャンパス。漢字で「溪水館」と表記します）があるというくらいです。

心育

「愛心」について補足しますと、新島は看護学校のみならず、同志社教育の全体で「愛心を以て」世に奉仕する人物を養成したかったのです。これが同志社をキリスト教主義で立てたそもその動機です。あるとき学生から「キリスト教って何ですか」と尋ねられた新島は、「真神之道、愛^{もつ}以て之^{これ}を貫く」と答えています（『現代語で読む新島襄』一九八頁）。キリスト教の神髄は愛にある、というのです。

彼は宗教（愛）をベースにした精神教育を「心育」と呼んでおります。十九世紀のあの時代、「心育」を強調した教育者が、何人いたでしょうか。今では、「心の教育」という言葉で、どこの学校（公立学校！）でも強調される時代になりました。偏差値優先の「頭の教育」がもたらした弊害を無視できなくなったからです。

新島は、大学を含めて学校教育が「頭の教育」に偏重すると、私利私欲の強い人間（自己^{じこちゅう}中人間）が生まれやすい、と嘆いています（①四四）。彼は「人の偉大さは、学識だけでなく、私心のなさに現れる。多くを学んだ者は、学んでいない者よりも、しばしば自己中心的になりがちである」と警告しています（⑦三一―、『現代語で読む新島襄』一七〇頁）。

ドイツ医学が、技術や理論に走りがちな傾向にあることを新島が懸念していたのを思い出してください。それを防ぐには、知育に加えて徳育が不可欠である、だから宗教教育をベースにした知徳並行教育を同志社は目指す、と新島が高らかに宣言する所以です。病院で言えば、「博愛」や「慈愛」に立脚する必要があります。同志社病院は単なる病院ではなく、「ミッション・ホスピタル」なんです。

伝道以外のフィールドで言えば、「愛心」や「隣人愛」がもっとも必要、というか社会的にもっとも有効に働く分野は、社会福祉と医療・看護の世界です。だから、大学レベルの社会福祉コースを日本で初めて設けたのは、（新島の死後ですが）学部レベルでも大学院レベルでも、同志社大学なんです。看護学校の場合で言えば、京都看病婦学校は西日本で一番、全国でも二番目に出来た学校というわけです。他よりも早く、愛心教育がこういう形で実を結ぶのですね。

デントンと医療・看護

女子大ですから、デントン（M.F.Denton）をオミットするわけにはまいりません。いわずと知れた同志社女学校の名物女性宣教師ですが、意外にも医学や医療、看護の面でも功労者です。実は彼女は来日直後（一八八八年）から、リチャーズの勧めで京都看病婦学校に寄宿し始めます。一八九一年からは同校で食物調理法（病人用の料理）と英語を教えます（F・B・クラブ『ミス・デントン』四八頁、三八六頁、同志社女子大学・同志社同窓会、二〇〇七年）。この間、卒業生の土倉^{どくら}政子（同志社女学校一八八九年六月卒）が一年間、デントンの助手を務めています（拙著『新島襄の師友たち』二九六頁）。

デントンは、その時の経験がものを言ったのか、それともリチャーズや医師の佐伯理一郎の感化を受けたためか、医学や看護教育にも強い関心を示すようになりました。その結果でしようね、同志社病院の院長や副院長を務めた医師の佐伯理一郎や川本^{じゅんどう}恂蔵に、「同志社女学校卒業生中よりは是非ぜひ、配偶者を撰定せよ」と迫り、ついには教え子の土倉姉妹（前者には小糸、後者には大糸。ふたりは政子の妹です）との結婚を成立させたのが、デントンでした（『ミス・デントン』九七～九八頁）。彼ら二組の結婚式が同時に（一八九三年十一月二十三日）同じ場所（奈良県吉野郡川上村の土倉家）で挙行された時、デントンが媒酌人として遠く吉野まで足を運んだことは、もちろんです。

デントンと日赤とのつながりも密接です。彼女は日露戦争開始の前年（一九〇三年）、日赤終身会員となったばかりか、翌年には篤志看護婦人会京都支部に入会します。戦時中は、出征兵士や凱旋兵の歓送迎や、傷病兵の慰問活動などに積極的に取り組んだほか、市民にも看護法を教えたといえます。その活動が評価され、一九〇五年には日赤から特別会員（名誉会員）として表彰されてもいます（同前、三八七～三八八頁）。同じく篤志看護婦として活躍した新島八重も顔負けするような活躍ですね。

女性医学校の夢を抱いたデントン

さらに注目すべきは、デントンが同志社女学校に医学部を設立するという壮大な将来構想を抱き、そ

の実現に向かって努力したことです。デントンは持ち前の資金調達力を発揮して、募金活動に邁進します。たまたま一八九一年に来日したモリス夫妻（フィラデルフィア在住の親日家で、熱心なクエイカー教徒の資産家です）からも賛同が得られ、アメリカに帰国したら募金運動をすることを約束してもらえました。おりにくアメリカの有志ふたりから、合わせて三千円の寄付が寄せられました。しかし、当時、同志社は財政的な窮地に陥っていましたので、それを救うためにデントンはその寄付を同志社に差し出さざるをえませんでした。こうして医学部の夢は潰れてしまいます（同前、四八～四九頁）。

けれども、彼女の夢は思わぬ形で再燃します。一九〇四年、京都見物に来たアメリカ人一家、ヴォークレーン（A.K.Vauclain）の息子が、京都で腸チフスに罹りました。その時、佐伯の手当てで回復したことが、ひとつの契機となりました。両親は佐伯を息子の命の恩人とみなし、同志社の女学生二名を医師に、もう二名を看護婦にするためアメリカに留学させる奨学金を寄付したい、と申し出ました。

人選に当たったデントンは、一九〇五年に卒業生（藤田まき）をフィラデルフィアに送り、看護学を学ばせます。翌年には、同じく卒業生ふたり（相沢みさほ、中川もと）を医学研修のために同地の大学に送ります。後者のふたりは女医となって帰国すると、デントンは京都市内（河原町御池下ル）に借家して住まわせました。そして以前からの伝道拠点（博愛社）に新たに診療所を設け、医療活動に当たらせました。しかしながらこの試みは、経営不振やスタッフの転出などのため、一年ほどで閉鎖されてしまいました（同前、三八八～三八九頁）。

ちなみにヴォークレーン夫人はフィラデルフィアの人で、一九〇六年に同志社女学校へピアノ購入のための寄付もしております（『同志社年表（未定稿）』五九頁、同志社社史史料編集所、一九七九年）。

「受くるよりも與ふるは福なり」

新島の死後、女学校でも医学教育を実施したいというデントンの構想は、同志社病院と看護学校の廃止と相前後して破綻いたしました。これら両方の試みと悲運に共通して関与したのが、佐伯理一郎という街医者でした。

彼は同志社が手を引いた同志社病院と看護学校を託され、戦後まで看護学校や産婆学校として継続させます。が、それも今や潰れてしまいました。注目すべきことに、佐伯は同志社の医療機関や事業の単なる継承者ではなくて、新島の志をも引き継ごうと努力した人です。彼は同時にデントンの「同志」でもあり、ふたりで幼稚園（現同志社幼稚園）を始めたりもしました。

そうした佐伯の志を端的に示すのが、自らモットーとした「受くるよりも與ふるは福なり」という聖句です。今の聖書の翻訳で言えば、「受けるよりも与えるほうが幸いである」です。篤実なクリスチャンですから、「聖書」の科目を設置して看護学生に受講させたり、自宅の敷地内に教会（現清和キリスト教会。京都ガーデンパレス裏）を創って看護学校の学生（ほとんど寄宿生です）に礼拝出席させたりしました。だから彼女らは卒業する頃にはほぼ全員がクリスチャンになります。

皆さんが今出川キャンパスに行くチャンスがあったら、烏丸通りを京都御苑の蛤門はまくりもんの所まで南下してください。門の向かいにKBS京都がありますが、そこが同志社病院や京都看病婦学校の跡地です。その裏手（室町通り）にマンションが建っていますが、その一角（佐伯家の跡地です）に佐伯の米寿記念碑が密やかに立っています。前面には彼がモットーとした聖句、さきほど紹介した「受くるよりも與ふるは福なり」が彫られています。現在、看病婦学校を偲べる記念碑は、これだけです。

そこで私はこの石碑を同志社に寄贈してもらえるように佐伯家と交渉したいと前から考えています。機は熟していると思いますので、いずれ「朗報」をお知らせできる日が来ると思います。そうなれば、看護学部の新入生は、若王子山の新島先生のお墓と共に、この記念碑をスタートラインにしてカレッジ・ライフを歩み始めてくださいね。

「愛心を以て」

そして、結論です。要するに、新島襄はもとより、佐伯にしてもデントンにしても、病院、看護学校、そしてキリスト教、これら三者は一体（いわば三位一体）だと確信していました。どれが欠けてもいけ

ないのです。今の同志社には医学部と病院が欠けたままですが、幸いキリスト教は残っています。皆さんは、数多くの大学や専門学校の中から同志社を選ばれたのですから、ほかにはない同志社独自のものをぜひ追求、吸収していただきたいと思います。

そして将来は、ぜひ創立者が望んだ「愛心を以て」看護に励む看護師になってほしいですね。資格を持っているだけの看護師よりも、さらにグレードアップした、一味も二味も違う「精神的に熟練した看護師」になることが、新島襄の思いを二十一世紀に繋げる道です。そのためには、ぜひキリスト教を基本にした勉強や訓練をしていただきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(本稿は講演「同志社の医療と看護-130年前の第一歩-」の原稿を加筆、修正したものです)

2016年度同志社女子大学看護学会講演会

同志社の医療と看護

130年前の第一歩



1886 2016

11/30 (水) 15:15~16:30

講演者 本井 康博
元同志社大学神学部教授

場 所 同志社女子大学
京田辺キャンパス C183

お問合せ 看護学部看護学科事務室
TEL.0774-65-8818
kango-t@dwc.doshisha.ac.jp

主 催 同志社女子大学 看護学部・看護学会

Design: Miyuki Fujihara / Photo: Kenichi Mori